二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 上田ながの
挿絵 ヤツシマテツヤ

序章　赤い瞳の狩人　006
第一章　少女二人　016
第二章　学園　033
第三章　囚われた狩人　056
第四章　悦楽の水　089
第五章　陵辱の祭り　123
第六章　狩人散る　169
終章　狩人の覚醒　239

登場人物紹介

Characters

村雨 静（むらさめ しずか）

ダークスーツに身を包む、男装の美少女剣士。人々を救う欲獣狩りとして闘うため、女としての自分を捨てようとしている。

己剣 霞（みつるぎかすみ）

青葉学園に通う剣道少女。優しく明るい性格で誰とでも仲良く接する。人付き合いを避ける静ともすぐにうち解けて、親友となる。

邑川 麗衣（むらかわ れい）

霞の同級生。お嬢様のような口調の美少女。

不動 涼介（ふどう りょうすけ）

かつて欲獣に襲われた静を救った、ベテランの欲獣狩り。静にとって尊敬すべき先輩。

『第三章　囚われた狩人』より

言葉通り、何の模様もないシンプルな下着が晒されてしまった。
「へ～、イメージ通りだな」
「い、いやっ！」
それを見た涼介がけらけらと笑う。彼にだけはそんな事を言われたくなく、思わず少女のような悲鳴を上げる。
そんな静の反応に喜びながら麗衣は体勢を変え、ショーツ間近まで顔を近づけてきた。
「ねえ、村雨さんはオナニーしています？」
「――な、何を馬鹿な！」
突然の質問に顔が赤くなる。
自慰など一度もした事はない。欲獣狩りにとっては不必要なものだからだ。身体に封印した欲獣によって、気持ちが高ぶった事は何度もあるが自慰に至った事など一度もない。
「だと思いました。だからこれから教えてあげます。女としての本当の喜びを……」
麗衣はぺろりと舌を出して笑った。
両手で静の足を無理やり開かせる。少女は抵抗する事もできず、M字型に足を広げるという情けない格好にされてしまった。麗衣はまず手始めにスンスンと鼻を動かし、臭いを嗅ぎ始めた。そんな屈辱的な行為に、静は顔を背ける。
「ふふ、凄く蒸れた臭いがしますわ」
狩人の気持ちなどまるで無視したツインテール少女は、太股にかいた汗を人差し指で拭

うと、ちゅぱちゅぱとそれを吸った。
「しょっぱくて美味しい」
などと言いながら、人差し指をショーツに突き立ててくる。
「これからあたしが何をするか分かりますぅ？」
「そ、そんな事知るか！」
怒気を含んだ言葉を返すが、自然とその先を想像してしまう。性的なものを避けてきたからこそ、逆にそういった知識もいくつか持っていた。
「じゃ、行くわよ」
言葉と同時にショーツの上に立てられた指が、秘部の割れ目に沿って動き始める。
「……く……んん……」
途端に快楽が身体を走った。初めて感じる感覚でよく分からないが、ぴりぴりと痺れるような感覚。指の動きはそれほど速くないが、確実にポイントを突いてくる。
指の動きに合わせるように、体内の欲獣が身体の内をノックしてきた。ここから出せと催促しているみたいな動き。与えられる刺激に耐えながら、同時に欲獣の行動も制限しなくてはならない。
「気持ちいいでしょ？」
「――っふ、はあはあはあ……だ、誰が……」
強がって否定するものの、感じる感覚は本物だ。責められているのは秘部だけだという

のに、身体全体が熱くなる。ピクッピクッと時折身体を痙攣させたように動かし、ベッドのシーツを強く握り締めた。
耐えよう耐えようと思えば思うほど、与えられる快楽も大きくなっていく。
「ふぁ……ん……そこはっ！」
口は半開きになり、どうしても声が上がってしまう。白い頬は紅潮し、全身から汗が噴き出るのを感じる。心なしか瞳も潤み始めていた。
静にとって初めて感じる女の快楽だった。身体を刺激が襲う度、身の内に封じた欲獣が喜びの声を上げ、身体の中に作り上げた檻の中から、今にも飛び出してきそうな勢いで暴れる。
「だいぶ感じてるみたいですわね。ほら、分かります？」
割れ目を撫でていた指を目の前に突き出された。部屋を照らす電灯の光を、うっすらと濡れる指先が反射してきらきらと輝く光景は、夢でも見ているのではないかという錯覚に陥らせる。あまりに淫靡な光景であり、思わず見入ってしまう。
「村雨さんのここ濡れてますわ。このままじゃ折角の可愛いパンティーが染みになってしまいますわね」
「う……嘘だっ！」
そんな事あるはずがない——と心で否定しても、麗衣が見せる現実は変わらない。
「嘘？　嘘ですか……さあ、どうでしょう。実際に見てみましょうか」

敵は欲獣狩りの言葉にわざとらしく反応してみせると、ショーツに指をかけた。誰にも見せた事のない秘所を暴かれる恐怖に、一瞬で心が凍りつく。
「ま、待て！　それは――」
「それは何？」
顔を真っ赤にして制止したところで止まるはずもなく、ショーツが少しずらされた。薄い繁みに守られた静の女の部分が、憎むべき敵の前に晒される。
刺激を受け続けたせいだろうか、少女の秘所はうっすらと口を開けている。ピンク色の秘肉が顔を覗かせ、思わずといった様子で麗衣も息を呑んだ。
これまでも、そしてこれからも誰にも見せないつもりでいた秘部を見つめられ、そのあまりの悔しさと羞恥に唇を強く噛む。
「大丈夫。そんなに悔しがる必要はありませんわ。だって……こんなに綺麗なんですもの。濡れて光る村雨さんのここ……凄く美味しそう。堪りませんわ」
あれだけ否定していたのに、麗衣が言う通り少女の秘所は泉のように愛液を分泌している。これほど情けない事はなかった。
麗衣は羞恥と屈辱に身体を震わせる静の姿を嬉しそうに見つめながら、今度は直接秘部に指を這わせてきた。
両手の指を開きかかった花弁に宛がうと、ゆっくりと花開かせる。すると薄ピンク色の粘膜が姿を現した。真珠のように小さな陰核は未だ包皮に包まれ姿を現してはいないが、

敏感そうな造りである。
「み……見るなっ！」
怒鳴ったところで敵は容赦してくれない。
麗衣はそんな静に対して一度ちらりと視線を向けただけで、すぐにまた少女の花弁へと視線を移す。指を奥へと侵入させると、肉襞を掻き分けてさらに花弁を広げた。
間近で見られているというだけで、秘奥からとろとろと愛液が分泌され、ひくひくと襞が動いた。
「本当に村雨さんは処女なのですね。ほら、こんなに恥垢が付いていますわ」
静からすれば耳を塞ぎたくなるような言葉を吐きながら、くちゅっという音と共に麗衣の舌が少女の内部へと侵入してくる。
「――んあっ！」
肉襞を掻き分け、侵入してきた舌が粘膜に触れた途端、我慢しきれずに声を上げてしまった。今まで感じた事のない異物。伸びる舌が蛇のように、膣中で蠢く。
「んふ、凄い臭いがしますわ。とってもいやらしい臭い……それに凄く濡れてる」
ぴちゃ、くちゅ……ちゅる……
水を飲むイヌのような音を立てながら、静の秘部を舐め続ける。明らかに先程よりも愛液の量は増え、同時に静の息の乱れも激しいものに変わっていた。はあはあと白い肌を桜色にしながら、それでも声を上げまいと必死になって耐えている。

秘部に顔を埋めた麗衣は、少女の様子を時折上目遣いで確認しながら、肉襞を一枚一枚丁寧に舐め上げていった。その度に静の腰がヒクッヒクッと反応する。

「だ……や、はっ……やめ――んん……」

思わず内腿で麗衣の頭を挟む。

「ほう……やっぱ気持ちがいいのか？」

だが、涼介は目敏(めざと)くその事を突っ込んできた。彼は両腕を組んだまま、楽しそうな笑みを浮かべている。

違う――そう否定したかったが、湧き上がってくる快楽がその言葉を押し流してしまう。

一体何だか分からない感覚が、身体の内側で大きくなっていくのを感じた。何もかもを呑み込んでしまいそうな、そんな大きなもの。

（――な、何だ？　わ……わたしが変になる）

自分の股間で上下に動く麗衣の頭。それを見つめながら静は腕を噛んだ。これ以上声が漏れるのを何とか阻止する。

（駄目だっ！　弱気になるな！）

ふうふうと鼻で息をしながら、噛みつく口により力を加える。大した力ではない。しかし、少しでも感じる痛みが少女から一瞬快楽を忘れさせた。黒い宝石のような瞳に意志の力が戻ってくる。

「へえ……」

麗衣は目を丸くし、感心したように息を吐いた。
「でもこうじゃなくちゃ面白くありませんわね」
「わ……わたしは負けない」
情けない格好はそのままだけれど、気持ちは強くなっていく。
「さすがは俺の村雨だ。よし、それじゃあ麗衣……どこまで耐えられるか試してやろうじゃないか」
（試す？）
涼介の言葉の意味を図りかねていると、麗衣の手によって唐突に体勢が変えられた。二人の前で秘部を晒している姿から、うつ伏せにされる。さらにその状態で腰を掴まれ、ちょうど二人に対して腰を突き出すような体勢にさせられた。
鍛えられ、引き締まったヒップが晒しものにされる。
「な、何をする気だ！」
「何って簡単な事ですわ。ほら、これが何か分かります？」
取り出されたのは一個の小さな球体。一見すればただのボールにしか見えない。だが欲獣狩りはそれが何であるのかをよく知っていた。
（欲獣の卵……）
正確にはそれが実体化したものだ。普通であればこの卵も目にする事はできない。炙り出すにはやはり血涙眼が必要になる。

「ま、これが俺の目的だよ。我々欲獣は生まれる時に媒介とした人間によって、その力も様々なバラつきができてしまう。しかし逆に考えれば、力を持った人間を媒介として利用できればより強い仲間を作り出す事ができるってわけだ」

つまり涼介は媒介として欲獣狩りを使う事によって、より強力な欲獣を作り出そうというのである。

卵を持った少女は、突き出されたヒップを入念に撫でる。

「本当村雨さんの肌って綺麗ね。羨ましい」

うっとりと呟いたかと思うと、パシンッと突然ヒップを叩いてきた。

「くあっ！」

口から悲鳴が上がる。

「いい音♪」

パシンッ、パシンッ！

駄々をこねる子供を叱るように、何度も何度も平手を打つ。その度にムチに打たれたような痛みが身体を突き抜けた。折檻を受ける子供のような自分に情けなさを覚え、屈辱で身体が震えた。

「うぐっ、くあっ——は……はあはあ……」

叩かれたヒップは真っ赤になっていた。じんじんと痺れるような感覚が身体の中、とりわけ下半身に残される。先程まで激しく愛撫を受けていた膣を、直接叩かれたような感覚

だった。それは決して痛みだけではない不思議な感覚だった。
（な……何だ？　何だこれ？）
屈辱的で情けない行為のはずなのに、何だか心の奥底でそれを求めているような気がする。
「ふふ、どうです、気持ちがいいでしょ？　でも、もっと気持ちよくさせてあげますわ」
静が身体に残る感覚に戸惑っていると、麗衣が白い手を伸ばし、赤く腫れたヒップに手をかけ、割れ目を開いてきた。開かれた尻の谷間から、小さな窄みが顔を出す。少しだけ黒ずんだそこは、小さな口を開けたり閉じたりしていた。
「うあっ――見るな！　見るなぁっ！」
人として最も恥ずべき場所を見られ、冷静でいる事などできない。
「見るな……なんてもったいない。こんなに可愛いのに」
ちょんちょんと何度か指でアヌスを突くと、唐突に指を内部へと突っ込んできた。ゆっくりとした動きで、穴の奥へと侵入してくる。ミリッミリッという音が聞こえるような気がした。
指の異物感が身体の中に広がり、欲獣狩りは身体を強張らせる。自然と指に力が籠り、ベッドシーツを握り締めた。
（違う、こんなのは違う！）
小さな穴が拡張されていくという自身の置かれた状況に、恐怖を感じる。

「い、痛いっ！　やめろっ！　やめろぉおぉおおぉっ！」
遂に悲鳴が上がった。感じるのは屈辱と痛みだけ。
「もう、そんなに暴れないでくださいね。少しの間我慢すればすぐに気持ちよくなりますわ。ふふ、それじゃあまずはお尻の洗浄から始めましょうか」
言うなり二本目の指が侵入し、小さな穴がさらに痛々しく広げられた。突き込まれた指が、腸内で曲げられる。コリコリした指関節が腸壁を擦り、指先で何度も深部を突かれた。
「うあああっ！　そ、そんなところにっ――」
アヌスを広げられ、内部の肉壁が丸見えになってしまう。麗衣の顔がそんなヒップの谷間に埋められた。艶やかな唇でアヌスに直接触れ、舌を伸ばし、身体の内側を丹念に舐め始める。
「ひゅあっ！　き、汚いっ！」
抗議の声を上げるものの、それを受け入れる相手ではない。
「んちゅ……ちゅうぅ……ふふ、汚くて当然ですわ。あたしの仕事は汚いここを、元気な子供を生む為の苗床に相応しいように綺麗にする事なんですから。んふふ、とても臭い」
臭いなどと言われ、羞恥のあまり瞳を閉じた。甦りかけた闘志が、再び萎え始める。
（違うっ！　諦めるな！）
そんな自分を叱咤する。アヌスを舐められる事で与えられる感覚を、意識的に耐え抜こうとする。

「わ……わたっしは――んんっ……ま……けない……ふぅっ！」
舐められているのは性器ではない。なのに、何故か肉壁を舐められる度に甘い声が漏れてしまう。そんな自分が情けない。
「なかなかいい声で啼くなあ。気持ちいいのかな？」
嬉しそうなわざとらしい涼介の声が向けられる。
それを否定しようと口を開くと、さらなる刺激が身体を襲ってきた。麗衣の舌が蛇のように滑りながら、菊門をぐちゅぐちゅと舐め上げる。少女のピンク色の秘肉を舌先でつんつん突いたかと思うと、ねっとり舐め、さらには口を窄めて吸引してくる。襲い来る刺激で思考が渦を巻き、同時に身体の内にいる欲獣が激しく動き出した。
自ら封じた欲獣に身体を乗っ取られた仲間たちの姿が脳裏を過ぎる。欲獣狩りとして気高かったものが、獣と同じく堕ちていく。もしこの身体を取られたら……考えるだけでも身体が震える。
乗っ取られる事に対する恐怖のせいか、身体の感覚はより敏感になっていく。一舐めごとに理性が削ぎ落とされていくような気がした。
（……嫌だ）
祈るように瞳を閉じると、唐突にアヌスについていた唇が離れた。
「さて、穴の周りはこれで綺麗になりましたわ。もちろん、村雨さんのここはもともと綺麗でしたけどね。さて、今度は奥を綺麗にしましょうか」

唾液でべとべとになったアヌスを見て、麗衣は満足そうに頷く。舌で掃除していたものを、どうやって奥に？　などと身構えていると、再び麗衣が顔を臀部の谷間に埋め込んでき、小さな口をアヌスに被せてきた。
「な……なに……へ、ひゃあっ！」
すると突然直腸内に生暖かい感覚が広がっていった。一体それが何なのか分からないが、奥までどんどんと入り込んでくる。ぬめぬめとした液体である事だけは、何となく理解できた。
「んあっ……はあはあ、な、な……んだこれは？」
排泄器官に注がれる得体の知れない液体に、錯乱する。
「ああそれか？　それは麗衣の唾液だよ。いわゆる浣腸と同じ効能を持っているんだ。便利なもんだと思わないか？」
浣腸――その言葉を聞くと共に、沸騰しそうなほどの羞恥が湧き上がってきた。
麗衣の言う奥の洗浄とは、唾液で総てを排泄させる事らしい。
ぐちゅぅ……ちゅり、ぐじゅるぅぅ……
わざとらしい音を立てて流し込まれる唾液――容赦なく腸を蹂躙してくる。それを意識すると、早速下腹部に差し込みが走った。
（だ、駄目だ……このままじゃ……）
恐ろしい予感が頭を過ぎる。友人だと思い始めていた麗衣と、自分が最も尊敬してきた

涼介――頭で敵だと分かっていても、そんな二人の前で漏らすことなど耐えられない。
「んふ……全部入った」
顔中を唾液でべとべとにして、麗衣がアヌスから顔を外す。普通の人間では考えられないほどの唾液を出したというのにけろりとした表情だ。
小さな穴はひくひくと動きながら、流し込まれた唾液を少しずつ垂れ流している。
「うあ……た、頼む……」
欲獣狩りはベッドの上で腹を押さえ、苦しみにのたうった。笑顔の涼介、麗衣とは対照的に顔色は真っ青である。
生暖かい唾液が、気分が悪くなりそうなぐらい腸の奥の奥まで浸透したかと思うと、今度は外に向かって逆流しようとしている。恐怖心から必死になって耐えてはいるものの、いつ決壊してもおかしくない。
「何を頼むの？」
何を言いたいか理解しているくせに、わざとらしく訊ね返してくる。
「とい……トイレに行かせてく……れ……んあ、だ、駄目だぁあああぁぁぁ！」
いきなり麗衣の冷たい掌が腹の上に置かれたか思うと、力を込めて押し込んできた。勢いでそのまま出してしまいそうになったが、括約筋に力を込め何とか耐える。
アヌスが痙攣するのがはっきり分かったが、漏らすまいと静は必死だった。
「よく耐えたな～。でもトイレには行かせられないな。大体まだ身体が回復していないだ

ろ。そんな状態じゃとても歩くことはできないぞ」
「そうですわ……あたしたちは別に気にしませんから、ここでさっさと楽になってしまいなさい。このままじゃ辛いだけですわ。それにあなたがお尻から出すところ見たいですし」
そんな事を言われても、人間としてのプライドが許さない。こんな場所で漏らすなど、家畜と何ら変わりがない。
だが激しく腹は鳴り続ける。その度に静は全身に力を込めて排泄欲を耐えなければならなかった。身体は脂汗でびっしょりと濡れ、上着の下、白いワイシャツが汗で肌に張りつき、下着の線や肌の色を浮き上がらせる。
――いいじゃないか。出してしまえよ。
内に巣食う欲獣の声が聞こえた気がした。
――楽になるぞ。大体そんな辛い思いをする必要がどこにあるんだ？　ここで出してしまえば心も身体も軽くなるぞ。
それはとても甘美な誘惑。確かにここで耐えるのをやめれば楽になれる。しかし、そんな事はできない。負ける事は決して許されない。
戦士として、村雨静としてのプライドが少女を支えた。
「まけ……まけな……い……」
苦しみながら二人を睨みつける。
そんな様子に涼介は肩を竦め、

「負けない、か……トイレに行かせてくれなんて懇願したくせによく言うよ。でも、このままじゃいつ卵を使えるか分からないな。仕方ない、洗浄は済んでいないが早速始めてみようじゃないか……」

と目線で麗衣へと指示を出した。すると彼女は嬉しそうに卵を取り出し、これ見よがしに痙攣するアヌスへと近づけてくる。

「い……今は……」

静の瞳が見開かれた。恐怖の色が灯る。

「大丈夫。きっと凄く気持ちがいいですわ……」

唾液で濡れた小さな窄みに、白い卵がぐちゅっという音を立てて吸いついた。卵は麗衣が手を離しても肛門から外れる事はない。

ぐち、ぐじりぃぃぃぃぃぃぃっ……

吸いついた卵はさも当然というかのように、アヌスへの侵入を開始した。ドリルのように回転しながら、穴を拡張しつつ奥へ奥へと進んでくる。穴が広げられる度、卵の冷たさが腸内に染み渡った。

「んあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

ぶちゅっぶじゅぅぅぅ！

初めて体内に受け入れる異物感。ただでさえ苦しんでいるところにより大きな苦しみが襲ってくる。静は背中を弓なりに反らし、情けない悲鳴を上げた。

「お、おなっ――ひあっ、くるっし、くるし――だめ、で、出るっ！　出てしまっふ！」
回転する卵が、直腸にたっぷり溜まった唾液を押し流す。肛門からプシュッ、プシュッと噴出する唾液がベッドを濡らし、麗衣を濡らした。
内部へ侵入した卵が腸壁を擦る。ゴリゴリと身体の中を削り取っていくようだった。
「うあっ！　こすって、わた……わたっしの……中、なかがっ！」
卵は少女が感じているのを分かっているのか、時折奥へ突き進むのをやめ、後退したりする。激しいストロークが繰り返され、突き出された腰ががくがくと震えた。
「ふあ、あっあっあっあっ！」
激しすぎる動きに息が詰まる。少女が舌を突き出し、はっはっと息を吐く姿はまるでイヌだった。
耐えていた便意までがその強さを増してくる。
普通に考えれば苦しいだけの状況だというのに、何故か気持ちがいい。直腸を擦られる度に、頭がぼんやりとしてくる。もうこのまま快楽に流されてしまっても……
「ちが――違うっ！」
激しく首を振り、僅かに覚えた感情を否定する。ここで流されてしまっては、総てが終わってしまう。
しかし湧き上がる快楽は否定できない。
「もう我慢するのはやめろ。身体に悪いぞ。もう限界だろ？」

薄笑いを浮かべる涼介の言葉通り、静の精神は限界に達しようとしていた。チカチカと目の前が明滅し、身体の内で白くて大きな球体が広がっていくように感じる。欲獣の卵が少女の全身を呑み込もうとしているようだった。

（駄目だっ！　違うっ！　わたしはこんなっ！　こんなに弱くないっ！）

自分の強さだけを頼みに今まで生きてきた少女には、快楽に流される自分が信じられなかった。欲獣狩りである村雨静のアイデンティティー、それは強い自分。

そんな自分が、成す術もなく敵の前で痴態を晒してしまっている。

「でふっ、うあぁっ！　もう、もう出るぅぅうぅ！」

顔を真っ赤にし、歯を食いしばって耐えていたが、それももう限界だった。

まるで自分自身が獣にでもなってしまったかのような絶叫が上がる。

ブシッ――――ブシャアアアアアッ！

心の中に張っていた一本の綱が切れた気がした。激しい音と共に、アヌスから大量の液体が流れ出る。ジェット噴射のように噴き出たそれはベッドを越え、保健室の壁を汚した。

ドブッ、ドジュウゥゥゥッ！

「うえあぁぁあああぁあ！　でってるぅぅ！　見るな！　見るなぁぁあああぁあ！」

伸びた手はベッドの端をしっかりと握り締めた。足先もピンと伸び、背中が海老のように反り上がっていく。黒い瞳は見開かれ、視線は宙を泳いだ。頭の中は真っ白になり、何も考えられなくなってしまう。

「まだ……まだでてるぅうぅぅ！　とまら、とまらなひぃいいいぃ！」
滝のように流れ出るそれは、永遠に出続けるのではないかと思うほど、長い時間飛び散り続けた。
なのに気持ちがいい。生まれてから今まで感じた事もない解放感が全身に行き渡り、幸福すら感じた。もっとこの感触を味わっていたい。無意識のうちにそんな事まで考えてしまう。
そんな人として最低の姿が、静が初めて迎える女の絶頂だった。
意志の力に満ち溢れた瞳は力なく彷徨（さまよ）い、惚けたように口を開く。身体は時折びくびくと痙攣する。
「あは、あはははははは」
そんな静を見つめる麗衣は、手を叩きながら喜び、うっとりと瞳を細めた。
「ああ、凄いですわ。まだあんなに出てる」
言葉通り液体は、未だにアヌスからとろとろと流れ続けている。あんなに小さかった窄みが、今では何の押さえもなしに開ききり、少女の内部を外界にさらけ出してしまっていた。
「は……あ、はあ、はあはあ……」
全身から力が抜けていった。ベッドの上にうつ伏せに倒れ、荒い息を吐きながら肩を上下させる。全身を倦怠感が包み込んでいく。

『第五章　陵辱の祭り』より

ばたばたとメイド姿の女生徒が集まり、体育教師に頭を下げた。慌てて静も頭を下げて謝る。敵に気を取られて関係ない人を巻き込むようでは、狩人失格だ。
「すいませんじゃないだろ！　こんな事して一般の方に火傷でもさせたらどうするつもりだ？　お前たちの問題だけじゃ済まないんだぞ！」
だが、教師は本気で怒っているらしく、顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくる。
「本当に申し訳ありません」
そんな志那虎を宥めに麗衣が現れた。横目でちらちらと静を見ながら、何度も頭を下げる。柔らかな物腰、甘えるような声で謝罪を繰り返すと、もともと女生徒に対しては甘い志那虎の態度はすぐに軟化した。
「……まあそこまで謝らなくてもいいけどな。ただ今後は気をつけろよ」
静自身、クラスメートたちもホッと胸を撫で下ろす。
「いえ、それだけではあたしたちの気が済みませんわ。下手をしたら先生に火傷を負わせてしまうところでしたから」
が、麗衣はここで話を終わらせる気はないらしい。周りの生徒たちは困ったように顔を見合わせる。志那虎本人も戸惑っているようだった。その中で、静だけが眉間に皺を寄せた渋い表情を浮かべる。
「当事者でないあたしが謝っても仕方がない事ですから。村雨さん本人がもっとしっかり頭を下げないといけない事ですし」

（そうきたか……）
大体予想はしていたものの、実際その通りの展開になると身構えてしまう。そんな心の動きなどお見通しなのか、麗衣の口元には薄笑いが張りついている。
教師は静の姿を確認すると、上唇を舌で舐めた。あのプールの一件で彼は静の絶頂を目にしている。あれ以来志那虎は学園で出会う度に好色そうな笑顔を向けてきた。俺だけは総てを知っている――無言でそう伝えてきた。
「そうだな……確かに邑川の言う通りだ。こういう事は本人が反省しないとな」
「そういう事です。それじゃあ……ハイこれ」
麗衣が差し出してきたのは一枚のナプキン。
「……こ……はあはあ……これは？」
すると体育教師の股間を指差す。コーヒーで濡れたズボンが染みになっていた。
「貴女がやった事ですから、ちゃんと拭きませんとね」
命令を受け、ナプキンとズボンを交互に見つめた。周りで見ている生徒たちもざわめく。
「わたしだったら絶対無理！」
「いくら自分が悪いからって……あいつのズボン拭くなんてね」
口々に勝手な事を言いながら、少女の決断を見守っている。
どうしても視線は股間に向いてしまう。嫌悪感で身体が震えた。だが、一般人に迷惑をかけてしまったのは、自分自身の責任だ。志那虎の人間性は別にしても、申し訳ないとい

う気持ちは確かにあった。
躊躇いながらも教師の前に跪(ひざまず)こうとする。
「ちょっと待ってください」
が、それを止めたのは麗衣だった。
「ちゃんと謝ってから始めなさい。それと皆さん、周りのテーブルが邪魔ですから片付けてくださる？」
わざと挑戦的な言葉遣いで命じてくる。それを受けた何人かの生徒たちがテーブルや椅子を教室の端に寄せ、教室中央に広い空間を作り出した。
偉そうに大股を開いて椅子に踏ん反り返る志那虎と、静がその場に残される。屈辱的なシチュエーションだったが、逆らう事はできなかった。
「……も……申し訳ありま……せん……でし……た。はあはあ……こ、これからお、お掃除いたし――ま……す……」
ずらりと周りを囲む生徒たちの視線や、消えない疼きに抵抗しながら頭を下げ跪き、渡されたナプキンでズボンの染みを拭く。教師に対する申し訳ないという気持ちは確かにあるが、これほど惨めな姿もない。
「最低」
「よくあんな事恥ずかしげもなくできるわね」
軽蔑の言葉が友人たちの口から漏れた。互いに囁くように言っているのだが、訓練によ

って常人以上の聴力を身につけている為嫌でも聞こえてくる。
こんな屈辱的状況から早く逃れようと必死になって染みを拭くのだが、ナプキンで拭いたぐらいで汚れが落ちる事はない。
「そんな事じゃいつまで経っても汚れは落ちませんわよ。ちゃんと濡らさないとね」
麗衣が向けてくる言葉はそれだけ。だがそれだけで何をさせたいのか理解できた。セクハラ教師も理解したらしい。さすがに始めは驚いたような表情を見せる。が、すぐにだらしないぐらいに表情を崩した。
敵はこれを舐めろと言っている。
人の所業ではない。獣や奴隷に対するのと何ら変わる事のない命令。胸の前で手を握り、落ち着きなく左右に視線を走らせる。周りの女生徒たちは視線を向けられると、顔を背けてしまう。真っ直ぐ視線を受け止めてくれるのは、皮肉な事に敵である麗衣だけである。
敵が向けてくる無言の圧力。
(……わたしは)
ギリッと奥歯を噛み締めながら、欲獣狩りは躊躇いつつも大きな決断を下した。総ては霞やここにいる皆の為だと覚悟を決める。
「はあはあ……し、失礼します……ん、んちゅぅ……」
強く瞳を閉じ、濡れた生地に舌を這わせた。ジャージは洗濯されていないのか、汗の臭いが染みついている。できるだけ臭いを嗅がないようにして生地に唾液を染み込ませるの

だが、どうしても蒸れた臭いが鼻をつき、何度かむせてしまった。そのような状況である程度まで唾液を染み込ませると、ナプキンで擦る。唇を離すと、布と小さな唇の間にねっとりとした糸が引いた。舌を這わす度に、くちゅくちゅと教室中に音が響く。

周りの生徒や客たちは大胆な静の行動を呆然と見つめた。舐められる志那虎もまさか本当に実行するとは思っていなかったらしく目を見開く。だが、やがてこの状態にも慣れたのか、満足そうな顔をしながら少女の頭部を撫で始めた。同時にズボン下の肉棒が硬くなり始める。

半勃ちになったペニスが生地を持ち上げる。伸ばした舌が亀頭部分に触れた。

「ひっ！」

思わず悲鳴を上げて顔を逸らす。

「何やってるんだよ。まだ染みになってるじゃないか……」

勃起した股間を恥ずかしげもなく晒し、更に命令を下す。思わずそんな教師の顔を睨みつけそうになったが、ぎりぎりのところで踏み止まる。彼は敵ではないのだと、自分自身に言い聞かせた。

「……ん、うむ……」

精神力を削り取りながら、再び股間に舌を伸ばす。その行為は既に染みを舐めるというよりも、ズボン越しの口奉仕にしか見えなかった。

ちろちろと舌先で突きながら、分泌させた唾液をぐちゅぐちゅと垂れ流す。淫靡なその

姿から、以前の静の姿は想像できない。
「ふむ……ちゅぐ……ふうふうふう……」
一舐めする度、矜持が傷つけられる。そんな心の傷を隠す為なのか、顔つきは刀を振るっている時のように、凛としたものだった。
しばらくすると少女の顔も唾液塗れになる。いつの間にか瞳が潤み、はあはあという荒い息が、周りに立つ生徒たちの耳にも届くようになった。鼻をつく臭いで、頭がぼうっとしてくる。嫌なはずなのに心地よく感じてしまった。
男子生徒のペニスは勃起し、制服ズボンにテントを張っている。女生徒たちも顔を桜色に染めながら、目を離せない様子で静を見つめていた。
「う～ん、まだまだだな」
必死になって舌を動かしていると、志那虎の口から言葉が漏れた。不満そうな顔で麗衣を見る。ツインテールの少女も慣れたもので、視線に対してすぐに頷いてみせた。
「お掃除はその辺まででいいとして、今度は先生が本当に火傷をしていないか確認してみてください。あと、礼儀を忘れちゃいけませんわよ」
その言葉が持つ意味は……
（これを……直接？）
答えは一つしか思い浮かばず、ごくりと息を呑む。
欲獣狩りとして戦ってきた中で、何度かペニスを見た事はあった。だがそれは血涙眼を

使って欲獣の正体を暴くまでのほんの僅かな時間。それにこんなに間近で見た事もない。
そんなものに直接奉仕をしている自分の姿を想像してしまう。するときゅんと股間が疼いた。
（ち、違うっ！）
慌ててそんな自分を否定し、誇り高き欲獣狩りとしての矜持を思い出す。
「おい、早くしてくれよ！」
そんな少女の葛藤など無視し、男は苛々しながら催促してきた。その姿には教師としての体面さえもない。軽蔑すべき姿だった。
（今だけだ。今の間だけ……）
何度も言い聞かせてきた事を再び自身で確認する。が、頭では分かっているつもりでも、身体は容易に動いてくれない。硬直する身体。どうしても躊躇してしまう。
「どうしましたの？」
葛藤を理解した上で、麗衣は冷たい声を向けてくる。
静は一度瞳を閉じると、大きく息を吸った。まだ負けたわけじゃないと自分に言い聞かせながら、腕を伸ばす。
「し……失礼いたします……ご、御主人様……」
礼儀を忘れるなという言葉に律儀に従い、一礼してから下着と一緒にズボンを下ろした。
現れた肉棒は想像していたよりも、ずっとグロテスクだった。肉茎には血管が浮き出て、

びくびくとそこだけが別個の生命体のように痙攣している。赤黒い亀頭の先端、鈴口からは透明な液体が分泌されている。一見しなくても分かっていた事だが、火傷なんかしてなかった。

魁偉な男性器を目にした女生徒の何人かは悲鳴を上げて顔を背ける。だが、それでも教室を出て人を呼びに行くような事はしない。そこから想像するに、麗衣がある程度の精神支配を行っているのだろう。それくらいの力を涼介は付与していると想像できた。

「や……やけっどは……してない……み、みたいです」

少女の報告に、志那虎はあからさまに不機嫌な表情を浮かべた。

「おいおい、嘘をつくのはよくないなあ。見てみろよ、こんなに腫れちゃってるだろ。ひりひりして痛いんだよ。お～痛い、このままじゃ死んじゃうよ」

わざとらしい上に、無理矢理過ぎる言葉。だが、今はこの言葉こそが真実である。

「ど、どうしたらいいので……しょ、しょうか……」

何を相手が求めているのか分かっていたが、それを認めたくはなかった。祈るように教師に訊ねる。

「そうだな。その可愛い舌で消毒してくれよ」

だが、少女の願いは好色な笑みを浮かべる教師によって、無残にも打ち砕かれた。

「……わ、分かりま……した……」

頷き、亀頭に顔を近づける。頭がくらくらするような精臭が鼻をついた。当然躊躇はあ

る。でも逆らえない。逆らっちゃいけない。必死に自分に言い訳をする。

くちぃ……

小さな口を開き、舌で亀頭に触れる。すると透明な液体の苦味が口腔一杯に広がった。思わず眉を顰めながらも、丹念に液体を舐め取ってみせる。

くちゅ、ちゅくり……ちゅるぅ……

知識でしか知らない行為。男女の間でこんな事をしていると初めて知った時、そのくだらなさに少女は冷笑した。一生縁がない行為だと信じていた。だというのに、現実ではクラスメートたちの目の前で、軽蔑すべき相手に積極的に口を開いている。

鈴口を舌先で何度も往復する。カリ首に舌を這わせると、頭頂部に向かってべろんべろん舐め上げた。

「……ん、ふう……むふぅ……」

「これじゃあ駄目だなぁ」

必死になって奉仕を続ける。早く終わらせたい、その一心で口奉仕に専念する。だが、体育教師は明らかに不満顔だった。

少女の奉仕は本当にただ舐めているだけ。フェラチオという行為自体が初めての彼女にとって、それ以上は想像の範囲外だった。亀頭部分をアイスクリームでも舐め取るように、行ったり来たりなぞるだけだ。

だから、不満を口にされてもどうすればよいのか分からない。困ったような表情で、志

那虎と麗衣に交互に視線を向ける。無意識のうちに敵に助けを求めている事に、静は気付いていなかった。
「そうだな……口で咥えてくれないか？」
事もなげに教師は言う。
（こんなモノを……）
口で咥えるには大きすぎるような気がした。醜悪な形に背中が粟立つ。繰り返し痙攣を続け、大きさを増していくペニスは、少女にとって異次元の存在だった。
恐怖し、躊躇っていると、静の頭に教師の手が添えられる。
「え？」
唐突な行動に戸惑いを覚える間もなく、無理矢理口をペニスに擦りつけられた。硬く熱い肉棒の感触を、直接顔に感じさせられる。そのまま凶悪な肉棒は小さな唇を割り、口腔内へと侵入してくる。
「んも――ふもぅ！」
顎が外れるかと思うほど肉棒は硬く、そして太い。侵入を拒もうと舌を動かすのだが、欲望そのものの圧力には勝てない。亀頭に巻きついていた舌が、肉茎へと移動する。舌でペニスを押し出そうとしつつ、口を窄めて侵入を拒否する。だが、それが相手にとっては気持ちがいいらしい。
「ふごっ……んごぉっ！　ぬい、抜いって――んも、おごぉ！」

突き込まれた肉棒で、抗議の声を上げる事もできない。先程まで過剰分泌していた唾液が、圧力で外に漏れ出した。顎を伝って流れ落ちていく。顎から床へと垂れ流れる唾液は、ネトッとした糸を引き、扇情的に男たちを誘った。

ペニス独特の鼻をつくような臭いと、すぐにでも吐き出したくなるような苦味が口腔に広がり、思考が掠れる。

「ああ〜、いい、凄く気持ちがいいよ。最高だ」

苦しむ少女とは対照的に、教師は眦（まなじり）を下げ実に気持ちよさそうだった。両手を少女の頭に添えたまま、容赦なく腰を振り始める。

ジュモッ、ジュッブ、グジュウゥゥ……

口腔を巨大なペニスが出たり入ったりする。その度に唾液が周囲に飛び散った。

「むぐっ、んぐ――おむぅ！　きった……ほおむぅ……」

汚いと口に出そうとしても、まるで言葉にならない。

勢いをつけたペニスが喉奥に突き刺さる。腰の動きは女性器に挿入しているのと何の変わりもなかった。

「おぼっおぼっおぼっ！」

リズミカルに腰が動く度に、口から苦しげな呻き声が漏れる。

「さてと、こっちも準備を始めないと。皆――お願い」

口腔を陵辱される静を嬉しそうに見つめていた麗衣が、薄笑いを浮かべながら周囲の生

徒に指示を下した。すると彼女たちは一旦調理室に引き下がったかと思うと、コーヒーカップなどを手にとって教室に戻ってきた。そして静を中心にしてそれを床に並べ始める。

この行動の意味を推し量るだけの余裕はなかった。男が容赦なく振りたくる腰を、抵抗もできずに受け止め続けるしかない。

喉奥に肉棒が打ち込まれる度、視界がチカチカ明滅した。吐き気がする。

「ぶっふ、んぶぶぅううぅぅ！」

口腔の粘膜が不浄な棒で擦られる。少女の唾液で肉茎がねっとりと輝いて見えた。ペニスは更に大きさと硬さを増していった。熱気も更に増していく。

静は所在なく空中をふらついていた腕を志那虎の腰に絡ませると、何とか敵の侵攻を食い止めようとした。だが、重戦車の如くその程度の妨害はものともしない。

「うあっ、イク、イクぞ！」

宣言するなり更にグラインドの速度が上がった。口腔に腰が叩きつけられる。

ブッジュ、ブッジュ、ブッジュ――ブッジュゥウウゥゥゥッ！

とどめといわんばかりに、奥の奥まで肉棒が突き入れられる。その瞬間、ただでさえ巨大なペニスが更に膨張した。鈴口が激しく震える。

「んもっほ、だめっ――なかはだめぇえぇえぇえぇっ！」

それが何か知識は持っていた。だから必死になって拒否する。だが、相手はそんな言葉を聞いてくれるような人間ではなかった。

どぶっ――どぶっどぶっどぶっ……どっびゅぅぅぅっ！

膨張しきったペニスの先端から、大量の精液が少女の口腔で射噴された。ねとねとと喉奥に絡みつく気色悪い液体。すぐにでも吐き出したい苦味が広がっていく。あっという間に口腔は白濁の波に呑まれてしまった。当然口腔内で処理できない分は、口端から外に漏れ出すか、喉奥へと流れ込んでくる。

「んぼぉぉっ！　ぶむぅぅぅぅっ！　ふむぅぅ！　んぐっ、んぐぅぅ！」

永遠にも近い時間だった。いつまで経っても終わらない射精。その量に息ができなくなる。口は塞がれているので鼻で酸素を求める。だが、そんな鼻にも精液が流れ込んでくる。鼻水のように汚液が流れ出る様を見て、野次馬からどっと笑いが起こった。

「ぐぶっじ……じぬ……くるじっひ！」

呼吸困難となり、自然と目尻に涙が浮かぶ。

口腔に溜まった白濁液。どろどろと喉に絡まり、不快感が広がっていく。突き込まれた肉棒と唇の間にある僅かな隙間から、外へと溢れ出していく。少女の口周りは、白濁汁でべたべたに汚された。更に鼻をつくような臭いが襲ってくる。吐き気を覚えるほどの臭気で何度もむせる。火傷しそうなほど口の中が熱い。こんなモノを飲んでいる人間がいるなんて、とてもではないが信じられない。自分は人として扱われていないのではないかと思った。

「うは～、気持ちいぃ～」

そんな少女の様子などまるで気にもせず、射精を終えた教師はすっきりした表情でペニスを引き抜く。
「ぶべっ――げぼっ、げぼぉぉっ！」
離れていくペニスと口の間に精液の糸が伸びた。同時に激しく咳き込み、口腔に溜まった精液を吐き出す。吐き出される粘着質の液体は、床に零れると共に並べられたコップの中にも溜まっていった。
「あ……あぁああ……」
少女は自分の身に起こった惨状に、悲痛な声を上げる。顎から流れ落ちる精液が、胸元まで汚し、白い胸の谷間に白濁液が溜まり、黒い衣装に染み込んでいく。
「うん、いい。凄く綺麗ですわ」
無残な静の姿を見つめる麗衣の表情は、うっとりと蕩けていた。
全身を包み込む脱力感と敗北感に耐えながら、メイド少女は自分に見惚れる敵に殺気を向ける。
「……ま、だだ……まだわたしは負けない」
「ふ～ん、そう。でもね、いくら村雨さんの意志が負けないなんていっても、身体はどうかしらね？」
（身体？）
敵の言葉に首を傾げた瞬間、それは襲ってきた。

「えっ？　なっ、何だ？　うあっ、アツッ！　熱いっ！」
身体の内側、下腹部辺りが熱を持ち疼き始める。理由は分からない。ただ、もどかしさだけが広がっていく。今まで感じていた遠隔愛撫とは違う感覚だ。どんな目に遭っても保ってきた正気までも、奪われてしまいそうな気がする。
「うふふ、凄いでしょ。それはね、身体の中にある欲獣の卵が反応しているんです。卵が孵るには大量の精液が必要でしてね……。貴女の子供が精子を求めているのね」
それは欲獣狩りである静だって知っていた。だが、実際に自身の身に起こるなどと想定した事はない。
（だ、駄目だ……流されるなっ！　わたしは、わたしは欲獣狩りだろ。こ、こんな事、こんな事で……うあ……ほしっ……欲しい……ち、違うっ！）
常人より遥かに強靭な意志を持っている欲獣狩りであっても、意識が流され始めている。床に自分で吐き出した精液までも、美味しそうに見えた。
「さて、そういう事で男性の皆さん。これより我がメイド喫茶特別奉仕を始めさせていただきます。御存知村雨静が、貴方がたの精液を最後の一滴まで搾り出しますわ」
その宣言にペニスを完全勃起させた男たちが歓声を上げた。
「だ、誰がそんな事っ！」
「なんて口では言っても、どうせさっきみたいに自分から舐めに行くんでしょ」
思わず声を荒げる静に、友人の一人が辛辣な言葉を投げてくる。反論しようにも、言葉

が出てこない。正直自分でも自信がなかった。それだけ惨めな姿を既に晒してしまっている。

そんな少女の前で男たちはズボンを脱ぐと、下半身を露出させた。天に向かって屹立するペニスの数々は、どれもこれも痛々しいほどだ。静は無意識のうちに息を呑みながら、視線を外す事ができずにいる。

「そ、それじゃあ……村雨さん宜しく」

クラスでも一番気弱な男子生徒が前に出てきた。志那虎のものより一回りも小さく、皮を被った肉棒が鼻先でひくひく動く。精臭もきつく、嗅ぐだけで思考が停止しそうになる。

最悪だった。気味の悪さに顔を背けようとする。が、どうしてか視線を外すことができない。金縛りにでもあったかのように、醜悪な包茎に視線が引き寄せられる。視線を向けているうちに、拒絶どころか無性にそれに触れてみたい気分になってきた。

（駄目だ。違う、やめろ……やめるんだ！）

腕が勝手にペニスへと伸びていく。必死になって止めるのに、言う事を聞いてくれない。

欲しい、精液が欲しい……身体が告げる。常に身体を押し包むもどかしさ。疼きを消すには精液を浴びるしかないのだ。

（仕方ない……こ、このままじゃ何もできない。わたしは悪くない……これは欲獣なんだ。わたしではなく欲獣が求めているんだ）

自身の行動を自ら正当化する。だがそれは言い訳でしかない。欲獣狩りにとって欲獣と

は敵なのだ。その欲獣が求めるがままに行動してしまえば、欲獣狩りが欲獣狩りである意味がなくなってしまう。

しかし、今の静はそんな理屈にも気がつけない。

遂にペニスに手が触れた。志那虎のものよりも小さいが、熱気と硬さは負けていない。口腔に唾液が溢れてくるのを感じた。

（仕方がないんだ。霞の為なんだ）

言い訳を繰り返し、小さな口を開く。

「はあはあ……んも……」

舌を伸ばしながらペニスを咥えた。さっきよりも圧迫感は少ない。くちくちと音を立てながら、積極的に奉仕する。顔を前後に激しく振ると、ゆさゆさと胸が揺れた。

志那虎のモノよりも小さくて舐めやすい。そんな感想が湧いてくる。

「すげっ、が、我慢でねぇ！」

順番待ちなどしていられないといった様子で、男子生徒たちが走り寄ってきた。それを見ると、自分の為に来てくれた――などという好意的な感情さえ生まれてしまう。横目で逞しい勃起をうっとりと見つめながら両手を伸ばすと、手を添え肉棒を扱き出した。先端からはすぐに先走り汁が流れ出し、小さく白い手がぐちょぐちょに汚される。

床に膝立ち状態での奉仕では、三人までが限界だ。残りの男たちは仕方なく自らの手で勃起を扱く。

自分を見て興奮している……そう考えると段々嬉しくなって――。
（駄目だ！）
流されそうになった自身を慌てて制止する。
こうして奉仕しているものの、完全に心が堕ちたわけではない。あくまでも後の反撃の為に仕方なくやっている事のはずだ。
「ふぅ、くむんん……」
意識は綱の上に立っている。いつバランスを崩してもおかしくないほど、危ういところに存在している。倒れないように常に意識を張り続けた。
「ね、ねえ村雨さん。口でやってもらうのもいいんだけど、もしよかったら胸で挟んでもらえないかな？」
胸で挟む――すぐには理解し難い提案であり、簡単にやれる事でもなかった。だが、意識では嫌だと分かっているのに、身体は勝手に男のリクエストに応えてしまう。メイド服を下にずらして胸元をはだけると、真っ白な双丘が姿を現す。半円球の美しい胸に、男子だけでなく女子からもため息が漏れた。
「こ、こうか？」
戸惑いつつ胸の谷間で肉棒を挟む。硬い肉棒の熱気で、火傷しそうな気がする。
「おいおい、それじゃあこっちが留守になるだろ」
両手で胸を支える為、手淫を受けていた男子から非難の声が上がった。そこでパイズリ

を受ける男子生徒自らが胸に手を添え、腰を動かし始めた。
じゅぶっじゅぶっと胸の谷間をペニスが前後する。谷間の中に顔を隠したかと思ったら、再びその姿を現す。まるで胸を犯されているような感覚。
「はあはあ……んちゅ、んむうっ、おふっ……ど、どう？」
谷間のペニスに舌を伸ばす。亀頭の先端をちゅくちゅくと舐めた。
「こっちも頼むよ」
手で扱いていたペニスを顔に擦りつけられる。男に言われるまでもなく、肉棒へと舌を這わせ口に含んだ。三本のペニスが硬さと大きさを増していく。
ぶっちゅ、ぐっちゅ、ぐぶぅ……
「よくあんな汚い事できるわね」
「幻滅～」
「最悪よ」
軽蔑の言葉が女子から投げつけられたが、もうそんな事も気にならなかった。ただ精液が欲しい、その想いが心の中を占めている。このままじゃ駄目だと分かっているのに、どうしても溢れ出る想いを消し去る事ができない。
咥えたペニスを頬を窄めて激しく吸引したかと思うと、舌を使って締め上げる。その間も空いている手で扱くのを忘れない。肉茎から亀頭までを何度も往復させ、更に睾丸を優しく揉む。

たった一度志那虎に奉仕しただけだというのに、もうコツを掴み始めていた。狩人たちの間でも、天才的な運動センスだけは認められていただけの事はある。身体を動かすことならば、何でもやろうと思えば器用にこなす事ができた。
「おむっ、ふぐぅっ！　んあっ、こっ、擦ってる！　む、むねっ！　ふあああ！」
谷間を行き来する肉棒が、勃起した乳首をゴリゴリと擦った。奉仕しているのはこちらなのに、溺れそうなほどの肉悦を感じる。
やがて亀頭部分が激しく膨張を始めた。鈴口がぴくぴくと痙攣する。
「うあ、出るっ！　出るよっ！」
限界を告げる声が漏れた。
「き、きてっ！　だ、出しって――」
静も射精を求める。理性はほとんど残っていない。瞬間、肉棒が限界まで膨れ上がった。
どびゅっ、どばっ、どっばどっばどっば、どびゅぅううぅっ！
三人が同時に射精した。飛び出した精液が顔に、髪に、身体に――全身に降りかかる。
「ふうあ――出てる！　凄い、凄い……んむ、ふむぅ！」
射精し続ける肉棒を咥え、ごくごくと精液を飲む。
周囲で自慰をしていた男たちも次々と射精する。発射された精液は並べられたカップの中に溜まっていった。
「ほら、まだまだですわ。ちゃんと皆平等に扱ってくださいね」

射精した男たちのペニスは、未だに硬く反り返っていた。
「はあ、はあはあ……ま、まだあんなに……」
禍々しささえ感じる怒張の列。でも、どうしても視線を逸らすことはできなかった。

静の奉仕は胸や口、腕だけでは済まなかった。麗衣が用意した椅子に座ると、床に寝転がった男の股間に足を伸ばす。足の裏で踏みつけるようにしてペニスを扱いた。胸だけでなく、掌や足の裏でも感じてしまう。
「うわっ、よくもまああんなに咥えられるものね」
女生徒の言葉通り、眼前には六本ものペニスが突きつけられていた。それら一本一本を丹念に舐め上げていく。
（こんなに硬くなってる）
勃起したペニスに視線が釘付けになる。理性では目の前の現実を否定しているのに、それを欲しがる衝動は消えてくれない。
（こんな汚いものを咥えてる……）
そう考えると、ゾクゾクと身体が震えた。
男たちはそんな少女の口を容赦なく犯し続けた。相手が意思を持った人間であるという事も忘れ、まるで自慰でもしているかのように腰を振り続ける。一人が口を使っている間、残りのものは腰を突き出しぐいぐいと顔にペニスを押しつけてくる。雄汁で頬が汚される。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/